若手研究（B）

日本人とコーヒー生産をめぐる国際移動とネットワークに関する歴史学的考察

[飯島研究室] 飯島真里子 准教授

上智大学 外国語学部 英語学科

日本人がハワイでコーヒーを生産？　縦横に越境したビジネスマンたち　モノと人の流れで、今の事象を紐解く

■史学一般　28年度

順位	機関種別名	機関名	新規採択累計数
1	国立大学	東京大学	14.5
2	国立大学	京都大学	7.5
3	私立大学	法政大学	6.0
4	国立大学	東京外国語大学	5.0
4	国立大学	大阪大学	5.0
6	国立大学	名古屋大学	4.0
7	国立大学	東北大学	3.0
7	国立大学	金沢大学	3.0
7	私立大学	上智大学	3.0
7	大学共同利用機関法人	国文学研究資料館	3.0

国家の枠組みを越え、人々の歴史を探っていく「グローバル・ヒストリー」というアプローチ

日本は世界有数のコーヒー消費国と言われます。日々口にするコーヒーが、どのような経緯で生産されてきたか、考えたことはあるでしょうか。コーヒーはイエメン周辺が原産で、アフリカや中南米など世界各地で栽培されています。中でもコナコーヒーで有名なハワイなどアジア太平洋地域の産地には、実は第二次世界大戦前から多数の日本人が関わっていました。

英語圏における歴史学を専門とする飯島真里子先生がそのことを知ったのは、大学2年生の時です。旅行先のハワイで、偶然入ったコーヒーショップのオーナーが日系3世でした。彼が語るファミリー・ヒストリーの中に登場した、戦前、コーヒー栽培を目的にハワイ島へ移住した祖父の代の日本人たちに興味を持ち、卒論テーマに選んだそうです。そして、それが現在の研究へとつながっていきました。

初期の調査では、昭和の初めにコナでコーヒー栽培に携わる人々の90%が日本人だったとわかりました。ハワイには古いホテル、墓地など日本人の足跡が多数残っています。さらに研究を進めて10年ほど経ったある日、飯島先生はたまたま観た台湾のドキュメンタリー映画で、人物の背後にコーヒーの木が映っているのに気付きます。なぜ、台湾にコーヒーが？ 調べていくと、日本統治時代にハワイから持ち込まれたということが判明しました。つまり、ハワイでコーヒーを栽培し、そこから植民地に栽培技術をもたらし、経営を成り立たせてきたのは日本人だったのです。

「戦前の移民史はこれまで、日本を起点に、大日本帝国内の満州や台湾へ、あるいは帝国外のハワイ、アメリカ、ブラジル、カナダへという一方向でしか語られていませんでした。けれども、それだけでは人の移動のリアリティを反映していません。日本人は、商品作物を介して多方向に移動し、アジア太平洋地域で大きなネットワークを構築していたのです」

一国だけの視点でなく、国家の枠組みを取り払った広い視点から歴史のダイナミズムを紐解く試みを「グローバル・ヒストリー」と言います。国境を越えて移動する人とモノを見ていくことも、そのアプローチ方法のひとつ。これにより、地域間のつながりや人間の歴史がより鮮明に解き明かされていきます。調査研究には時間もかかります。飯島先生が2014年から取り組んできたテーマ「日本人とコーヒー生産をめぐる国際移動とネットワークに関する歴史学的考察」も、その息の長い研究の一環を成すものです。

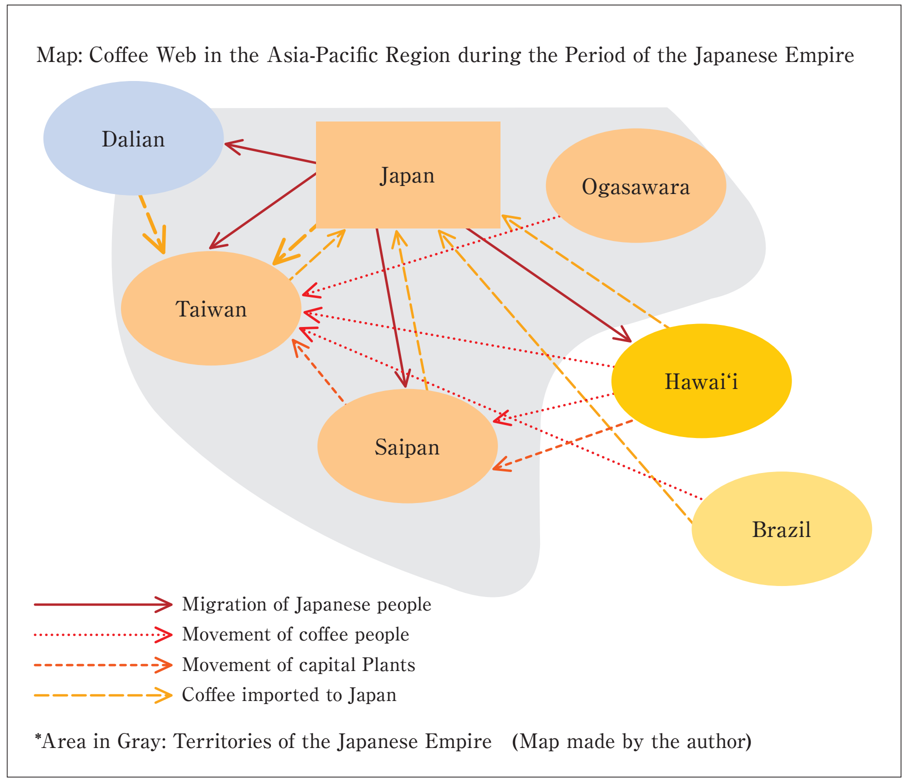
移住地のハワイから台湾やサイパンへコーヒー栽培技術を携えて越境した日本人たち

アジア太平洋地域のコーヒー生産については、体系立った資料はほとんど残されていません。調査に際しては、日本では当時の新聞や文献、コーヒー会社の社史などを精査し、1行でも記述があればさらに詳しく調べていきました。また、ハワイでは移民やコーヒー関係の資料に当たり、栽培に関わっている日系2世、3世の話を聞き取りました。台湾では、当時の総督府が作成した農政資料なども見ていきました。

そうして明らかになっていったのは、ハワイでコーヒーの生産に携わった日本人が台湾のコーヒー産業の発展に深く関わっていたことです。

例えば、「キーコーヒー」の創業者・柴田文次は、1930年に台湾で大きなコーヒー農園を開く前に、コナで調査を行いました。また、ハワイで初めて日本酒を製造し、日本に帰国後は貿易商になった住田多次郎が1926年にサイパンで開いた農園は、コナのコーヒー農園経営者たちの出資を受け成功を収めました。彼はさらに、1930年に台湾でも農園を築いています。

ふとした会話からわかったこともあります。コーヒーで町おこしに取り組む台湾中部の阿里山エリアで役所を訪ねた飯島先生は、「ゴトウさん」という名が何度も話に出てくることに気付きます。それは、ハワイ島でコナコーヒーの品質改良に尽力した技術者・バロン後藤のことでした。



日本人は戦前から、ハワイやブラジルへの移民を端緒に、コーヒーの栽培や販売をめぐるネットワークを構築していた。

いったんは廃れた台湾のコーヒー生産も復興が進む。日本統治下だった台湾でコーヒー農園を経営したのも、復興に尽力したのも「日本人」だった。

研究は一次資料の読み解きも必須。これはハワイ島の日本人コーヒー栽培に関する1898年の報告書と、1925年頃のコナでの日系人新年会の写真。

「バロン後藤は、ハワイに移住した日本人の子である日系2世です。彼は戦後1970年代にアメリカ人として台湾の阿里山に行き、衰退していたコーヒー栽培の復活に取り組んでいました。しかし、このことは文献には残っていません。私自身も予期していなかった史実でした」

コーヒーひとつを見ていくだけでも、作物と栽培技術を携えた人々が縦横に越境を重ねていたことが、はっきりとしていきました。

身近な食品の技術移転の歴史を紐解くことが、我々の現在を重層的・相対的に見る視点を養う

日本人移民の歴史は、白人社会からの被差別の文脈で語られがちです。しかし、ハワイや台湾の先住民から見れば、日本人は支配した側。今もハワイでは、政治や経済を担っているのはほとんどが日系人と白人です。

「アジア太平洋地域の島々は長い間、被支配地でした。台湾は、中国やオランダ、日本の。ハワイは、ヨーロッパやアメリカの支配を受けていました。日本人は、アメリカ領のハワイでコーヒー栽培技術を培い、大日本帝国の植民地だった台湾やサイパンへと移転させました。こうした人々の自由な移動の歴史とともに、さまざまな帝国による重層的な支配が見えてきます」

商品作物をめぐる越境史はコーヒーに限ったことではありません。サトウキビの栽培も、ハワイからフィリピンや南洋の島嶼部、沖縄へと日本人によって移転されました。台湾でパイナップルの缶詰をつくる技術も、ハワイからもたらされました。身近な食べ物を通した「食のグローバル・ヒストリー」が、遠い島々の歴史と私たちの現在の暮らしを結び付けます。

「現在は、砂糖をめぐるアジア太平洋地域のネットワーク解明にも取り組んでいます」と飯島先生。「今につながる過去を知ることで、現代の事象を客観的に捉えることができます。学生さんたちには、その大切さをぜひ伝えていきたい」と、熱く語ります。

高校生へのメッセージ

「歴史学」の楽しさはフィールドに出てこそです

自分が好きなテーマをアカデミックに掘り下げていけるのが大学での学びの醍醐味です。私の専門分野である歴史学は、現代の自分の生活や考え方と過去の人々の営みとをつなげていく学問。高校までの「歴史」授業とは違い、フィールドに出ることを大事にしています。文献を探るだけでなく、対象地に行ってこそ理解できることは多彩です。グローバル・ヒストリーを紐解くには語学力も必須。興味分野を探求する奥深い楽しさに触れてください。

飯島真里子 准教授

上智大学外国語学部英語学科卒業。オックスフォード大学大学院修士課程修了（歴史学）。オックスフォード大学大学院博士課程修了（歴史学）。2012年4月より上智大学外国語学部英語学科准教授、2015年4月同大学アメリカ・カナダ研究所所長。